不安の克服

家庭教育と異文化間理解*

クリストフ・モルゲンタラー（ベルン大学教授）
ペーター・アッカーマン（エアランゲン大学教授）

はじめに

ひとつの文化がもつ固有の慣習や価値観といった特徴は、その文化に属する者の中で不安が生じたときに顕在化する。そのためマイクロ・レベル(個々人・家族・小集団などのレベル)で見られる不安、あるいは苦労、心配などのありようと、その解消パターンに特に留意する必要があると考えている。

ここでは「不安の克服」という観点から文化の価値観形成に焦点を当て、クリストフ・モルゲンタラー（Christoph Morgenthaler）が実施した調査プロジェクト「子供を寝かしつける際の親子の感情を安定させる習慣に関する研究」を紹介したいと思う。精神援助活動に関する研究に従事してきたモルゲンタラーは当初、スイス・ベルン（Bern）州の教会の牧師をしていたことから、研究の出発点は教会の伝統にある。

西欧の共同体において、一般に人生相談は教会の責務であった。ところが、現代社会においては、宗教の直接的な影響が弱まっている。こういった社会の変化をうけて、「伝統」や古くから受け継がれた儀式・習慣がもっていた宗教的要素も薄れていると思われる。それでもこれらの儀式・習慣をどのような形で家族内や学校で守るべきかという議論が継続的に必要であるとモルゲンタラーは考えた。以上が同調査プロジェクトを行った理由である。

牧師の仕事と祈りの伝統について

よく知られているように、ヨーロッパでは地域や国によってキリスト教教会の仕組みと役割は相当異なっている。ひとくちに西欧社会といっても、キリスト教には歴史の流れの中で別々の発展を遂げた宗派がある。西ヨーロッパの場合、主にローマ法王を中心としたカトリック系と、これを修正しようとする運動から誕生したプロテスタント系があり、西ヨーロッパ文化はこの２つの系統に大別することができる。

モルゲンタラーの出発点であるスイス・ベルン州では、16世紀の半ばころから、ローマ法王の権威を認めず、独立したプロテスタント系教会を中心に人々の道徳が統一され、儀式よりも聖書の理解が重んじられてきた。したがって、牧師の役割は、「教会」という組織内の階級制度とはほとんど無関係に、聖書という原典の解説とそれに基づく道徳の指導や不安の解消に努めることにあると言えよう。

宗教と国家の関係をみると、今日では、もちろん政教分離が確立されている。しかし日本からみると少し理解が難しいかもしれない

が、ヨーロッパの他の地域と同様に、スイス・ベルン州でも、教会に対して機構的・金銭的な国家支援が見られる。というのも、国家にとって、さまざまな対立を緩和する宗教的道徳や牧師のソーシャル・ワーカーとしての役割などが重要であるからである。

ここでベルンの様子をみてみると、教会の権威者といった「上」から定められた儀式やしきたりはほとんど行われない。なぜならベルンのプロテスタント系牧師たちや教会関係者は、祈りというものを、神と人間とを結ぶ、親子のような関係を深めるものと見なしてきたからである。

モルゲンタラーの家庭でも、そのような伝統が受け継がれていて、彼の母は子供のために祈りの本を作った。祈りのなかでは人間にとって辛いことが取り挙げられ、祈りによって子供の不安を解消することがテーマになっている。ここで、モルゲンタラーの母が、聖書を参考しながら考えだした2つの祈りを紹介したい。なお言葉はすべて地元の方言、つまり子供が実際に話している言葉で、みごとな語呂合わせになっている。絵も彼女が描いたものである。[1]

例　1

私は木のようで	I bi wie ne Boum（Ich bin wie ein Baum）
その根は土のなかを	wo mit de Wurzle（der mit den Wurzeln）
深く延びていく	i d Aerde abe reckt（in die Erde hinunterreicht,）
木は大きくなり、高くなり	wo wachst und sech streckt（der wächst und sich streckt,）
小川のほとりに立って	wo am Wasserbach steit（der am Wasserbach steht）
青い木の葉を茂らせる。	u grüeni Blettli treit.（und grüne Blätter trägt.）
天主よ	Du, Gott,（Du, Gott,）
あなたは私の太陽だ	bisch my Himmelssunne（bist meine Himmelssonne）
私を生かす水だ	mys Läbeswasser（mein Lebenswasser）
天空にある泉だ。	my Himmelsbrunne!（mein Himmelsbrunnen!）
私の生命の木に	Schänk Blüete u Früchť（Schenke Blüten und Früchte）
花と実を結ばせよ	a my Läbesboum（an meinen Lebensbaum,）
そして今晩私に	u gi mr hüt z Nacht（und gib mir heute nacht）
よい夢をみさせ給え。アーメン	e guete Troum. Amen.（einen guten Traum. Amen.）

例　2

日が暮れた	d r Tag isch verby（Der Tag ist vorbei,）
私はいましばらく歌を歌いながら	i singe no chly（ich singe noch eine Weile）
一日のあれこれを	u dänke derby（und denke dabei）

注

1）Verena Morgenthaler: Chinder-Psalter. Zürich (Gotthelf Verlag). 2.Auflage 1994.

振り返える	a alls, wo isch gsy（an alles, was war.）
私の左にあった事（＝あまりよくなかった事）を	a ds Lingge（ans Linke）
私の右にあった事（＝満足できる事）を	a ds Rächte（ans Rechte）
よかったことを	a ds Guete（ans Gute）
わるかったことを。	a ds Schlächte.（ans Schlechte.）
よい子だったこと、笑ったこと	Bi lieb gsy, ha glacht（Ich war lieb, habe gelacht.）
いたずらをしたこと	chly Dummheite gmacht（einige Dummheiten gemacht.）
涙を流して	ha gränne t（habe geweint）
そしてまた笑ったこと	u ha wider glacht.（und habe wieder gelacht.）
晴天と雨天	Sunne u Räge（Sonne und Regen.）
喜びと苦しみ	Fröid u Plag（Freude und Plage）
すべて子供の一日につきものだ	ghöre halt i Chindertag（gehören halt in den Kindertag.）
今はもう、疲れ果てた	Jitz bin i todmüed（Jetzt bin ich todmüde）
神様、私を守ってください。アーメン	u möcht, dass Gott mi bhüet. Amen （und möchte, dass mich Gott behüte. Amen）

（括弧内は標準ドイツ語訳）

図　1

図　2

生活リズムと家庭内のリチュアル

生活リズムと固定したリチュアル（習慣的行為）は、人々の日常の中で、いわば屋台骨として機能しているといえる。日常生活を安定させ、不安を解消するために、非常に重要な役割を果たしているのである。また歴史的な観点から見ると、「リズム」と「リチュアル」は地域ごとに固有の文化を形成してきたものであり、そして宗教的な性格を必ず持っているといえよう。

そこでモルゲンタラーは、地域文化において生活リズムを構成しているものを調査・分析することにした。具体的にはクリスマスや

誕生日などの年中行事、洗礼式、葬式といった宗教儀式、あるいは食事や就寝に関する行為などをさすが、それらの一環として家庭内での子供の寝かしつけの時間の祈りと行動パターンに焦点を当てた。そして現代の社会においてはどのようなリチュアルが見られるか、また家庭相談の際、牧師がどのような行為とリチュアルを紹介したり勧めたりすればいいのか、という点について考察した。

1000件以上の家族を調査した結果、子供が寝る前に、顔を洗ったり歯を磨いたりするような、衛生上の習慣以外に、歌、話し合い、祈り、そしておやすみのキス、という4つの行為が非常に重要であることが分かった。これらの行為を "ritual axis"（リチュアルの連続からなる枢軸）と名づけることにした。

1. 歌

歌に関していえば、次のものが圧倒的に多く歌われていた。

I ghöre n es Glöckli, das lütet so nätt	(Ich höre ein Glöcklein, das läutet so nett)
dr Tag isch vergange, jitz gang i ids Bett	(der Tag ist vergangen, jetzt geh ich ins Bett)
im Bett tue n i bätte, u schlafe de y	(im Bett tu ich beten und schlafe dann ein)
dr Liebgott im Himu wird wohl bi mr sy.	(der liebe Gott im Himmel wird wohl bei mir sein.)
Amen	(Amen)

鈴の音が聞こえてくる、とてもきれいな
一日が終わり、今は寝る時間
横になってまずは祈る、そして眠りにおちる
天の神様はきっと、私のそばにいてくれる。アーメン。

2. 話し合い

話し合いでは、子供の本をテーマにしたものもあれば、過ぎた一日を振り返って翌日のことを計画するといったものもある。

3. 祈り

祈りの有無や形式、その内容の多様性を把握することは、調査の結果のなかで特別に興味深い点のひとつであった。かなり伝統的な祈りが行われている家庭では、祈りの言葉が固定していて、子供は毎日同じ文句を繰り返すことによって精神的安定を得ようとする。次の祈りはその例のひとつである。（言語は標準ドイツ語）

くたびれた、さあ、休もうと	Müde bin ich, geh zur Ruh
目をとじる	schliesse meine Äuglein zu
天にいる父よ、あなたの目で	Vater, lass das Auge Dein
ぼくの寝床を見守ってください	über meinem Bette sein
今日ぼくのしたことが悪かったなら	Hab ich Unrecht heut getan
神さま！　どうか見逃してください	sieh es, lieber Gott, nicht an

あなたの慈悲、あなたの慈愛は　　Deine Gnad, Deine Huld
どんな罪でもうち消すもの　　tilgen alle Schuld

別のある家族では、短い導入文のあと、子供と親が決まり文句を使わずに自由にその祈りを展開させる習慣が見られた。

次に母親がイタリア人の子供の例を挙げる。短い導入文のあと、遠く離れた親戚やおじいさんの羊などを皆祈りのなかで列挙しないと寝られない、という精神的な不安定が感じられる。
（言語は方言）

Lieber Gott
Wir danken wir für den Tag, den Du uns heute gegeben hast, und dass alles gut gegangen ist und wir auch gesund sein dürfen. Dass Du und alle beschützt und bewahrt hast. Bewahre Du bitte auch　－
私を愛している神様よ
あなたのくださった今日という一日のため、お礼を述べます。今日という日を無事に過ごすことができて、健康でいることができて、ありがとうございました。私たち皆を守ってくださって、ありがとうございました。そして、次の人も守ってください　－

（本人が言う）お父さん	Dädi、
（となりで寝ている弟が言う）お父さん	dr Dädi
（お母さんが言う）お父さん	dr Dädi
（弟が言う）お母さん	ds Mammi
（お母さん自身が言う）お母さん	ds Mammi
（本人が言う）お母さん	ds Mammi
（弟が言う）	Melina（妹のこと）
（お母さんが言う）	Melina

また　―

Gotti	代父
Fritz	（名前）
Marion	（名前）
Grosi	おばあちゃん
der nonno	（イタリアにいる）おじいちゃん
Bänze	（おじいちゃんの羊のこと）

などなど、合計27の人と動物を、神様が守ってくださるように願っている。

4．おやすみのキス

おやすみのキスは、調査した家族のほとんどがするもので、いわゆる「寝かしつけのリチュアルの終止符」として特別に重要視されている。（ただし、「キス」という単語のイメージはあまりか

わいくないので、ミュンチ（Müntschi）、つまり「感情を込めてちょっと口で相手に触る」という言い方を使うのが一般的である。）おやすみのキスは家族ごとにやり方が著しく異なっており、家族ごとの「小文化」の代表的なものであると言っても良い。キスをしながら抱擁するかしないか、父親が先にするか母親がするか、音を出すか出さないか、一回しかしないか何回もするかなど、この「リチュアルの終止符」の打ち方のバリエーションは無限である。

夫婦と親子関係

すでに指摘したように、子供の寝かしつけのリチュアルにみられる宗教的伝統とその影響はかなり漠然としており、神（天主）に感謝の意を表したり願いごとをしたりしているとはいっても、宗教色が濃いとはけっして言えない。それにしても、このような家庭内のリチュアルがなぜ存続しているのだろうか。

昔の、特に農村社会においては、自然に依存する気持ちが強く、したがって宗教色の濃い祈りやリチュアルは一日のリズムを構成する決定的なものだったにちがいない。しかし、都会的生活では、家庭内の人間関係はもはや農村社会のそれと異なってきた。夫婦同士の関係の比重が大きくなるにつれて、家庭内では特に父親の役割が変わった。たとえば、だれが子供を寝かせたかという質問に対して、「母親」という回答が予想通り、最も多かったが、「両親が一緒に寝かしつけた」という回答も非常に多かった。そして３番目に多い回答は、「父親」であった。また、母親と父親が、それぞれ一日おきに交互に子供を寝かしつける例もあり、その際それぞれの親が子供と一緒に祈りをした。また、祈りも他の宗教的行為もまったくなかったケースもあった。

では、子供の寝かしつけのリチュアルについて調査に協力した家族はどう考えているのだろうか。それを知るために、アンケートをとってみた。親から得られた回答は、次のように分けることができる。

グループ１．　宗教について触れる回答

１．１　神様に祈っていても、宗教のことを直接には考えていないと強調

就寝前の時間は、「落ち着く時間」、「心を安定させる時間」、「守られている気持ちにさせる時間」、「家族が皆一緒にいる時間」、または、「子供に何か大切な知恵を伝える時間」である。この回答が最も多かった。

１．２　漠然とだが宗教的なニュアンスがある

就寝前の時間は、「悪かったことを正す時間」、「問題を起こしたことについて、はっきりした言葉を使って反省する時間」、「人生と命に関するテーマ、つまり『大きなテーマ』について話す時間」である。

１．３　就寝前の時間を、明確に宗教的な要素と結びついて考えている

就寝前の時間は、「私たちの上に『何か』があることを認識させる時間」、「天主のことを話し合う時間」、「天主とイエスについての話を聞く時間」である。この回答は、一番数が少なかった。

るときの姿と表情を撮影したものだが、ひとつは母親と一緒に、もうひとつは遊びの中で人形と一緒に祈るときの様子である。どちらのときも子供の姿と表情が非常に似ており、行動が固定化していることがうかがえる。また人間は子供時代に経験した寝かしつけのリチュアルを、人形などと遊ぶときに繰り返すだけではなく、大人になって子供をもつようになると、自分が親から学んだものと同じようなリチュアルを実践するようになると、数多くの人が調査の中で述べた。

2．2　親は親、子供は子供という線引きの重要性を強調

子供を寝かせた後の時間を念頭においたもので、両親が一緒に子供を寝かしつければ、後は夫婦の自由時間になるというものである。この回答をした人の数は少なくなかった。

ところで家族相談は牧師など聖職者の仕事の一部であるが、その現状について次のように指摘できよう。まず家族相談には夫婦と子供の関係にまつわる問題が増加している。その中でこの回答（2.2）のように父親と母親がともに時間をさいて子供を安心させて寝かせる家庭は良い例である。しかし子供が生まれたために、「夫婦同士の時間が奪われた」と認識している場合、喧嘩が増え、離婚の話がおこりやすい。このようなケースがあるために、家族相談は非常に難しくなってきたという。

グループ2．　宗教について触れない回答

2．1　文化固有の習慣と伝統、固定した行動パターンなどを強調

この回答を一番印象的な形で伝えたのは、あるVTRによる報告である。それは子供が祈

異文化間理解の観点から考えた家庭内の生活リズムとリチュアル

冒頭に触れたように、ヨーロッパでは、特にプロテスタント系の社会での教会や牧師の

役割は聖書に基づいた倫理と道徳をもって社会の安定を図ることにあった。したがって、安定した生活リズム、安定した日常のリチュアル、安定した人間同士の信頼関係などを保障し、それを維持する方法を考えることは、本来、教会と教会の関係者に与えられている重要な課題であるといえよう。

確かに、"ritual axis"（リチュアルの連続からなる枢軸）、つまり、子供に安心感を与える歌、祈り、話し合い、おやすみのキスのような決まりきった行為の連続は、激しく変化する社会の中で、大きな意味を持っているに違いない。数多くの家庭が、宗教的信仰心があってもなくても、これらのリチュアルを肯定的に見ているのも、そのためだと思われる。

しかし、ヨーロッパの現代社会には無数の断絶と亀裂があり、一つの町、州、国のなかで、たくさんの小文化が存在し、リズムとリチュアルの重要性が分かっていても、家庭相談の場で戸惑うことがしばしばある。社会の典型的な断絶や対立として次のものが挙げられる。

1．　カトリック系家族とプロテスタント系家族の価値観のずれ

教会とその組織と権威が比較的に強い影響を及ぼしているカトリック系の家族と、宗教的組織と離れて個人の祈りと話し合いを重視するプロテスタント系の家族の価値観のずれが挙げられる。ちなみに、２０世紀の半ばごろまでは、カトリック系の家族とプロテスタント系の家族が住む州や地域が分かれていたため、地域ごとに地域固有の価値観が統一されていたということが指摘できる。現代社会では地域から地域へ移動することは、ごく一般的なことであるが、地域の特徴と地域の宗教的伝統との関連は現在まで存続しているために、移動してきた者は精神的ストレスを感じる場合が少なくない。

2．　文化的背景の違いによる新たな断絶

今日、大きく異なった文化的背景を持つ家族が同じ社会で生活することによって、新たな断絶が生じてくる。例えば、スイス・ベルン州では、ヨーロッパ諸国からの家族だけでなく、インドやスリランカ、アフリカ、南米、アジアの国々などから来た家族が多く住んでいる。それに伴い国際結婚の件数や国際結婚で生まれた子供の数も急増している。安定した収入があるかぎり、家庭内では自分なりのリズムとリチュアルを生かすことができるが、こういった環境でのアイデンティティ探しのプロセスは必ずしも楽ではない。

3．　社会からの断絶

貧困、アルコール依存症、麻薬、鬱病、家庭内暴力などのため、一般社会から切り離された人、あるいは離婚がもたらしたストレスと金銭の問題に悩む人は、最も恐るべき断絶を経験しているといえよう。このように断絶の向こう側にいて、社会と切り離されて生活している人はどのようにすれば安定を得ることができるのか、牧師にとってその手助けは特に難しい問題である。

異文化間理解の観点から家庭内の生活リズムとリチュアルの意義を考えた場合、まず、現代社会の著しい変動や流動性の把握の難しさを指摘しなければならないと思う。しかし、今見てきたこの調査は次のことを示唆している。まずは文化の内部では、不安を解消し安定を与えようとする伝統と習慣が常に存在しているということである。

同時に、家族や小集団では、その伝統と習

慣に変更を加えたり、新たに組み合わせたり、否定したりするプロセスも常に起こっている。一般に、従来正統だと思われた生活パターンを問い直す動きが生じると、新しいパターンと常識が現れてくるのであるが、歌、神様へのお願いなど、宗教的な行為、あるいは宗教に由来する行為はまったく消えてしまうわけではない。

自文化と異文化の流れと流動性を理解するには、昔からの生活リズムと習慣を認識し、同時に調査を通じてそれらの変化と変遷を把握することが重要な鍵になるといえるだろう。

*本講演録は、2008年4月10日（木）に山口大学人文学部異文化交流研究施設第17回講演会として開催されたモルゲンタラーの講演会の講演内容を通訳兼コメンテーターのアッカーマンが整理して文章化したものである。

Christoph Morgenthaler（クリストフ・モルゲンタラー）

モルゲンタラーは最初、スイスの首都ベルンのキリスト教教会の牧師として働いていたが、1985年にスイス・ベルン大学の教授となり、それ以降、相談活動と精神援助活動に関する研究に従事してきた。指導者としての仕事の重点は、若い牧師やソーシャル・ワーカーの教育であり、人間が遭遇するさまざまな苦労や不安にどのように対処できるか、というテーマを扱う授業を受け持っている。人間の成長過程、婚姻、子供の誕生、夫婦関係、病気、AIDS、老い（aging）、死と死別などに関する学術研究をしながら、同時に、一般の人の相談相手になる、という実践的な活動もモルゲンタラーの仕事の一部である。

Peter Ackermann（ペーター・アッカーマン）

アッカーマンは、1990年以降、ドイツ・エアランゲン（Erlangen）大学の日本文化研究科の教授として、社会における価値観形成や異文化間コミュニケーションを中心として研究や活動をしてきた。異文化を「生きた文化」として理解しようと思うなら、その文化の固定した外観や特徴（いわゆるcultural patterns）を網羅するよりも、これまで以上に、その文化のマイクロ・レベルに注目して、そこで日常的な問題に対処する戦略（coping strategies）のありように焦点を当てる必要があると考えている。

ISSN 1881-9281

異文化研究

2010年　第4号

論文
日本の地名のアクセント型とラテン語アクセント規則との不思議な関係について　太田　聡
Manner-of-Motion Verbs and Subjectification　Masashi TAKEMOTO

研究ノート
動物供犠における人間と動物との関係から導かれる宗教性についての一考察　山根　洋平

報告
伝記を上演する四つの試み——2009年ウィーン芸術週間から　田中　均
前漢皇帝十一陵の踏査　橋本　義則
ミシガン大学アナーバー校アフロアメリカン&アフリカン研究センター滞在記　藤永　康政

講演録
不安の克服　家庭教育と異文化間理解　クリストフ・モルゲンタラー　ペーター・アッカーマン
『紅楼夢』と『源氏物語』の異同　陳熙中
自己規律の欠如——《先延ばしの技術》とは何か　カイ・ファン・アイケルス
韓国における人文学の現状と課題　洪　性君・李　潤相
ヨーロッパ哲学者の誕生——哲学の世界地図の由縁について　エルマー・ホーレンシュタイン

プロジェクト
人文学部プロジェクト活動報告

山口大学人文学部　異文化交流研究施設　Vol. 4

『異文化研究』第4号
2010年3月31日
ISSN　1881-9281
発行者＝山口大学人文学部異文化交流研究施設（施設長：湯川洋司）
編集者＝『異文化研究』編集委員会
〒753-8540　山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内　異文化交流研究施設
電話番号　083-933-5289
印刷・製本　有限会社いづみプリンティング